

学校自慢

地域とともに歩み、9年目を迎えた小中一貫校

長狭学園（鴨川市立長狭小学校・長狭中学校）校長

わたなべ ひろひと
渡邊 弘仁



1 はじめに

本校は、県道34号鴨川保田線（通称：長狭街道）のほぼ中間点に位置する、豊かな自然に囲まれた山里の小規模校である。

主^す基^き・吉^よ尾^し・大^お山^おの3小学校を統合した長狭小学校と長狭中学校が平成21年4月に県内初となる小中一貫校（1～9年生）として開校し、本年度で9年目を迎えた。



過日行われた運動会。8年前の開校時に中学生に手を引かれていたあどけない1年生が、今年は頼もしい9年生として1年生をリードしている。その姿はこの9年間の成長の象徴であり、私たち学校教職員以上に、保護者や地域の方々にとって感慨深いものだったのではないかと感じている。

2 施設一体型の一貫校として

開校時より、学校教育目標「地域の次代を担う活力ある『長狭っ子』の育成」を掲げ、教育活動を行ってきた。

(1)施設面等

長狭小学校、長狭中学校は、行政上、別個の学校であるが、施設一体型のメリットを生かし、「学園」の一体感を作り出している。

- ①小中の教職員は職員室を共有し、小中全職員に兼務発令をしている。
- ②校舎は、前期棟と中後期棟の2つがあり、前期棟には1～4年生の教室、中後期棟の2階には中期学年（5, 6, 7年生）の教室、後期

学年（8, 9年生）の教室は3階に配置した。

- ③体育館メインアリーナ脇にサブアリーナを併設した。（小中同時の活動も可能）

(2)教育課程等

9年間の学びの連続性を重視したカリキュラムを編成し、実践してきた。

- ①4・3・2制（前期・中期・後期）を踏まえた教育課程の実施
- ②中学校専科教員による教科担任制やT・Tの積極的な導入（主に中期学年から）
- ③異年齢交流による行事及び委員会・清掃等の日常活動の充実
- ④小中教員の相互授業参観、研究協議
- ⑤地域人材（ボランティア等）の活用
- ⑥5年生からの部活動参加（長期休業中など）
更に昨年度から、小から中へのより円滑な接続を意図し、新たな取組を加えた。
- ⑦中期学年からの50分授業と定期テスト

これにより、前期棟で学ぶ1～4年生の45分授業と、中後期棟で学ぶ5～9年生まで、児童生徒の活動時間の統一を図ることができた。

加えて、5年生から定期テストを意識させることで、自分の目標を定め、計画的に家庭学習に取り組む児童が増えてきた。

3 歩みを更にその先へ

開校以来9年間、先人の不断の努力と保護者・地域の協力・支援により、本校の一貫校としてのシステムは確立されてきた。本校が今後も地域にとって希望の光であり続けるために、次の歩みとして、「4・3・2制を生かしつつ、6年生のリーダー性をさらに伸長すること」、「新学習指導要領を基盤に、9年間の学びの連続性と、地域の特色を生かした『総合的な学習の時間』の見直し」に重点的に取り組んでいきたいと考えている。

提

言

リーダーとしての「学校の先生」は自ら夢や Vision を語ろう



株式会社ウェザーニューズ 取締役最高運営責任者 **あべ だいすけ**
安部 大介

1 はじめに

民間気象会社の一員もんがいかんということで、教育に関しては全くの門外漢である。本年度に「全教連・所長協 千葉大会」にて光栄にも講演させて頂いたことがきっかけで、このたび寄稿の機会を頂いた。子どもたちが大変お世話になっていることを通じて、千葉県の教育に携わっている皆さんには敬意を表すとともに、感謝の念が絶えない。今回は、貴重な機会を頂いたこともあり、日々仕事をする中で感じていることを、個人的な意見として提言とさせて頂く。具体的には、「コミュニケーション力」と「リーダー」というキーワードで、日本の学生に足りないと感じられるもの、実際の社会における企業活動に期待される力と現在の学校教育で学ぶものの間で感じるギャップ、「企業のリーダー像」から見たリーダーとしての「学校の先生」について言及する。皆様が描かれる学校教育の未来に少しでもプラスになれば幸いである。

2 「しゃべらせても、書かせても、やらせても No.1」を目指して

自然現象である気象には国境は無いということもあり、Global の事業活動の中で、日米欧の学生に接する機会の中で最も強く感じるのが、日本の学生のコミュニケーション力の弱さである。最近の日本での採用でも留学生が多く応募がある中で、英語でのプレゼンテーション等という言語の問題もあるのだが、最も大きな違いは、海外の学生は自信を持って「できる事」をアピールしてくる点である。実力的には差がなくても、しっかりと自信を持って発言で

きるかどうかで、印象は随分違う。実力的には日本の学生は決して劣らないにもかかわらず、勿体無い限りである。

これはコミュニケーション力が海外の学生の方が強いケースが多いという例であるが、Global で真に通用する人は、「書かせても一流、喋らせても一流、やらせても一流」と3つの分野で一流な人と勝手ながら定義している。個人的な偏見を交えて一般論として書かせていただくと、「書くこと」は欧州の人が得意、「コミュニケーション」は米国の人が得意だが、実際に「やらせる」と日本人が No.1 である。これは、実際に仕事をすると言い得て妙と感ずることが多々ある。一方で、日本人が苦手な「書くこと」、「コミュニケーションすること」については弱い点があり、反対に言えば、まだまだ教育で伸びる余地があるのではないかと。特に社会に出て大事なものはコミュニケーション力であり、コミュニケーション力を高められるような教育が出来れば、学生が世に出た際に、Global で活躍する下地となるであろう。

3 リーダーとしての「学校の先生」は自ら夢や Vision を語ろう

私から見ると、先生という存在は学生・生徒にとって、単に授業を教えてもらうという関係を超えて、学校生活上でのあらゆる面で“師”であり、企業の中ではリーダーということができると感じる。それでは、リーダーに求められるものとはなんだろうか。リーダーを勝手ながら事業面から定義させていただくと、リーダーとは、夢や Vision を語り、方向性に向かって継続的

にチャレンジして組織や人をリードする人である。そして、リーダーは組織や人の未来をギャランティーする。

また、リーダーにはコミュニケーション力が必要条件である。コミュニケーション力とは、単に喋るのが上手というのではない。自分の Vision や考え方がしっかりと相手に伝えられ、また相手の話を聞いて、考え方を高めていく力のことである。自分の考えをしっかりと伝えるには、自分の持つ Vision がはっきりとしており、未来に対する戦略、方向性がしっかりとしていることが大事である。少なくとも弊社では、リーダーになればなるほど、自らの Vision や考え方、方向性を語る必要があるとあり、そういった高いレベルのリーダーが事業やチームをリードしていくことになる。そのリーダーの背中を見ているスタッフは、いつかはあの様なリーダーになれるように自らを研鑽するのである。学校の先生は一義的には教える立場であり、企業のリーダーとは異なる部分があると思うが、学生・生徒が成長するようにリードするという面は疑いない。そういう意味で、学生や生徒から「ああいう人になりたい」と強く憧れるリーダーとしての先生を目指していただきたい。リーダーとして様々なことに挑戦し、学校や先生個人の目標に向かってリードしている姿を見せることこそが、本当の意味での学生・生徒を育てることになるのではないだろうか。

抽象的な話だけでは分かりにくいので、私自身が教育現場を良くわからない中で、あえて、例をあげさせていただく。例えば、高校の先生であれば、シラバスで定義される目標に対して、定量的な目標である KPI (Key Performance Indicator) を定め、目標を有言した上で、目標を達成するための Vision を掲げる。そして、具体的な方策を学生とともに考え、学生とともに試行錯誤し実践するような形もその1つかもしいない。(許されるのかどうかは分からないが。)

一方向ではない、相互のコミュニケー

ションを通じて、全員が目標を認識し、個々の力を最大限に発揮し目標を成し遂げる、ということが組織のリーダーとしての責任である。また、その過程で関係した人達は成長し、リーダーシップとは何か、ということ学ぶのである。リーダーとしての先生は、是非、夢や Vision を語り自ら目標に向かって一緒になって挑戦する姿を見せて頂きたい。

4 さいごに

本提言においてのリーダーとは気象という新しいビジネスを追求するウェザーニューズのリーダー像を語ったものであり、一般的な企業のリーダー像とは異なる点もあると思われるので注意いただきたい。

企業のリーダーと学校の先生は役割が異なるという御意見、御批判も当然であろうかと思うが、学校教育を経て卒業してくる子どもたちが、将来、社会に出て戸惑うことなく活躍できるように、学校教育で大事にしているものと、社会が期待している人材像の間を埋められる一助になれば幸いである。

最後に一つリクエストがある。リーダーは楽しんで業務し、実践することが求められる。仕事を楽しめず暗い顔をしているリーダーは魅力的に見えず、リードされる側に良い影響を及ぼさない。組織の中で、リーダーが楽しんで仕事を実施するには、「自らの成長を感じられること」、「(企業、社会、学校に) 貢献していること」、「評価されること」の3条件が成り立つことが必要だ。提言の最後として、「自らが成長していると感じられること」、「貢献していること」の2つを各々の先生が実践して学校教育として成果が出てきた時には、組織として現場の先生をしっかりと評価してあげて欲しい。学校という職場、先生という職業がもっともっと魅力あふれるものにするためにも、教育委員会の皆様には切に願う次第である。